令和３年度　第3回学力体力推進会議（書面会議）

恵庭市教育部教育総務課

【開催日】　　令和４年3月２日（水）

【会　場】　　書面会議

【出席者】（※書面表決書提出者）
＜委　員＞　長岡　秀明（恵庭市教育委員会点検評価委員）
結城　健介（恵庭市教育委員会点検評価委員）
高桑　純　（恵庭市教育委員会点検評価委員）
中山　舞　（恵庭市PTA連合会）
加藤　紀子（恵庭市小中学校校長会）
野口　俊之（恵庭市小中学校教頭会）
佐々木　保（若草小学校・柏陽中学校　学校運営協議会）
木村　博子（恵庭市教育委員会指導主事：学力向上アドバイザー）
河内　紀彦（北海道ハイテクACアカデミー）

【内　容】
１．議事
（１）令和3年度　小学校体育授業支援事業の実施結果について【資料１参照】
【質問・意見等】
（A委員）
・専門性の高い人材からの指導を受けることは、子ども達の体力のみならず、体育の学力向上のために非常に有効だと考えます。
・将来的に、教科担任制が導入されたときに、どのような連携体制が望ましいのかということについて、考えておいていただきたいと思います。
→教科担任制が導入された場合、より専門的な関わりが期待できるため、授業支援の在り方や専門人材との連携について検討していきたい。
（B委員）
・毎年子どもたちには成長があり、体格も変化することを考えると、個に合わせた指導を継続的に行うことは、充分妥当性があり、次年度も支援事業を行う方向性を評価する。
（C委員）
・継続した実施が行われ、成果を収めているのが大いに評価できます。
・予算の関係もありますが、学校の希望に応え、指導員の派遣が増加できることを期待します。
→指導員の増加については、引き続き検討していきたい。

（D委員）
・子どもの感想を聞いたところ、走るだけではなく走る目線やスタートダッシュ、走る格好等、専門性の高い学びを得ることができたということでした。可能であれば回数や種目を増やして体力の向上につながればと感じました。
→種目については、学校の希望に応じてハイテクＡＣとも相談しながら決定していきたい。回数に関しては、増加について検討していきたい。
（E委員）
・ハイテクアカデミーさんより講師を派遣していただき、児童の技術力向上につな

がったと感じる。次年度も講師依頼回数を増やしてほしい。
→まずは、児童数により不均衡が生じている学校へ機会が平等となるよう進めた上で、全体の回数の増加について検討したい。

・この事業との関係はわからないが、次年度の水泳事業に対してもインストラクターが派遣されることになり、授業力の向上につながると感じている。
→令和４年度より、市民プールの見直しを実施するにあたり、市内スポーツクラブからインストラクター派遣を予定しており、教職員の働き方改革及び授業改善に繋げたい。また、プール施設の廃止を検討している学校については、同クラブのプールを利用するなど、官民連携による水泳授業の機会の確保も併せて進めたい。

（F委員）

・ハイテクACアカデミーとの連携は恵庭市の強み（ストロングポイント）にできる事業なので、今後も継続をお願いしたいと思います。

（H委員）

・現在の教育界の最大の課題は、教員採用試験を受ける人がいない（減少）ことです。このままでは将来的に「AI」が教員にならざるを得ない世界になります。不足分を、再任用教員が補充していますが、高齢な教員にとっては、「体育」の授業が一番負担です。再任用教員が「ハーフを希望する」理由もそこにあります。小学校の専科教員を増やすことと並行して、小学校体育授業支援事業を拡大していくことが必要です。
→専科教員については、国や道の動向を注視していきたい。当事業の拡大については、実績等も踏まえて検討していく。

（I委員）

・小学校体育授業については、コロナ禍での実施がスケジュール的にも厳しく、全ての要望に対応できなかった。実施してみると、3クラス合同での指導は「感染対策」「児童の理解度」などの点を考えてみても難しいと感じた。2クラスまたは1クラスでの実施が今後は最適である。または複数回の実施があると良い。
→人数が多くなると、コロナ禍での実施には課題があると感じている。また、効果を最大化するためには、ある程度の人数規模に制限することも必要であり、回数の増加と併せて検討したい。

【特に意見なし】１名

（２）令和3年度中学校体育授業支援事業の試行実施結果について【資料２参照】

【質問・意見等】

（A委員）

・小学校と異なり、専門の教員が配置されている中学校では、体育教員のモチベーションの維持など、慎重な配慮が必要と思われます。その意味で、試行的に1校で実施してみたことは、適切な配慮だったと思います。しかし、この取組がどの学校にとっても有効な施策になるかどうかは、やや不安が残ります。おそらく、学校体制（踏み込んで表現すれば管理職と体育教員との連携など）によっては、うまく進まない場合もありうるのではないかと心配しています。
→体育の専門教員がいる中学校では、より専門的な指導に取り組めることが期待される一方で、指導方法等で必ずしも外部人材との調整がうまくいかないケースも予想されるため、試行実施を続ける中で課題や実施の方向性について検討していきたい。

・「今後の方向性」に示されているように、例えば特定の単元（ダンス、柔道など）に限定するなど、各学校からの要望に合わせた対応が重要と思われます。実施回

数を少なくすることよりも、どのような支援をするかについて配慮することが重要と考えます。
→実施にあたっては、学校とも十分に調整したうえで、可能な限り要望に沿った形で進めていきたい。
（B委員）
・中学校の授業支援事業の試行結果の分析からの方向性の見直しも、過程としてあると思える。
→試行結果を踏まえて、今後の方向性を検討したいと考えている。
（C委員）
・試行実施結果から、大きな成果があることが期待できます。
・中学校の場合、体育教員が配属されており、各学校や体育教員及び外部指導者との連携が大切になってくると考えられます。専門の指導者からの支援は大いに期待できますので、増加の方向で進めていただきたい。
→試行結果や学校の意見を踏まえて、拡大等については検討したい。
（D委員）
・保健体育の教員は中学校にいますが、より理解と体力向上への意識を高め、興味を持ってもらうためにも、もう少し頻度を上げてほしいという気持ちもあります。
→保健体育の教員との連携についても試行を通して確認しながら、今後の進め方を検討したい。
（F委員）
・恵庭市の特色ある外部人材の活用につながり、すべてがウインウインの関係を築けると考えます。次年度以降の継続をお願いしたいと考えます。
→次年度も試行を継続し、中学校での活用について検討していく。
（H委員）
・中学校は教科担任制です。私は理科の教員でしたが、大学時の専門は化学でした。生物の「植物名」や地学の「石の名」は教員になってから、自学しました。体育の先生も、専門があります。専門以外は、自分で学んでいかなければなりません。授業でも部活でも健康づくりでも役に立つ「知識・技能」はレベルの高い専門家の指導を公平に受けることができるようにしてあげるべきだと思います。
いろいろな事が進化しているのです。
（I委員）
・中学校体育授業に関しては、小学校からのつながりを感じ小中学校を通して専門的な指導者から指導を受ける経験ができることは大変良いと感じた。また教員の指導力向上にもつながると思う。
→教員の指導力向上のためにも、試行実施を継続していきたい。

【特に意見なし】２名

（３）令和3年度　中学校における部活動指導員配置事業について【資料3参照】
【質問・意見等】
（A委員）
・部活動への外部人材の活用については、生徒にとっても教員の働き方改革の面でも、大変期待できる取組と考えます。今後とも、予算の増額による人材の増員に取り組んでいただくよう期待します。
・外部からの指導者が配置されても、本来の顧問が立ち会わなければならないなど旧態依然とした学校の文化が残っている可能性も考えられます。これまでの部活動に対する考え方の転換が必要になるので、ぜひ検証に努めていただきたいと思います。

→部活動の地域移行と合わせて、検討を進めていきたい。
・退職した教員の中には、部活動に対する情熱や指導力に優れた人材が多く見つかると思います。学校の状況も理解しているため、積極的に活用すべきと考えます。そのためには、退職後の生活をある程度保障できる待遇が必要と思われるので、効果的な採用ができるよう検討をお願いします。
→適切な配置時数など、引き続き検証していく。
（B委員）
・部活動を地域の活動として、位置づけるあり方は納得できる。また、その方向をふまえた市教委の取組も評価できる。
・外部指導員と部活動指導員のとらえを現場に周知徹底して、誤解を防ぐようお願いしたい。
→引き続き周知していく。
（C委員）
・部活動指導についての1つの改善策と考えるが、課題も多く、そんなに拡大されないと考えられます。
・部活動指導員の確保はなかなか難しいと考えます。

（E委員）
・働き方改革の最先端をいく部活動指導員配置について、より多くの指導員を配置していくことを希望している。
（F委員）
・中学校の現場には非常にありがたい事業です。計画的に導入していただくことをお願いします。
（H委員）
・働き方改革が進められています。長時間労働の原因は、小学校では家庭学習ノートの点検と学級通信、中学校では部活動指導です。今、文科省・スポーツ庁・文化庁を含めて中学校から部活動を切り離して、地域に受け皿を作るまでのつなぎとして、部活動指導員配置の拡大を希望します。
（I委員）
・配置についてはとても良いと感じた。ただ中学校は種目の偏りが出てしまうため合同での実施ができるような形が望ましい。
・恵庭市内の中学生に平等に指導が受けられる環境ができると良いと感じた。
→拠点校方式、合同部活動など様々な方法を検討し、地域にあった部活動の在り方を引き続き検討していきたい。

【特に意見なし】２名

（４）中学校における部活動の地域移行について【資料4参照】
【質問・意見等】
（A委員）
・特定の部活動などからステップを踏みながら、徐々に導入していくことが重要と考えます。
・将来的には地域の取組に移行すべきと考えるので、活動場所の確保（市の体育施設の充実や各学校の施設の分担活用）と、スクールバスなどによる生徒の移動方法についても検討いただきたいと思います。
・大会への出場枠などについて、中体連との連携も進めておく必要があると思います。
→活動場所や移動手段など課題も把握しながら、大会実施団体へは様々な団体と

協力して、適切な在り方を検討してもらえるよう周知していく。
（B委員）
・体育協会との連携のため、学校（部）、地域の関係団体との細かい点の打ち合わせ、すり合わせも必要になってくると思われる。
→体育協会、学校、市教委と連携しながら進めていきたい。
（C委員）
・部活動の外部指導員や部活動指導員の配置など、少しずつ地域に協力を願う実践がなされています。しかし、上部へつながる大会（全道大会や、全中）を目指す考え方が残っている限り、課題が多いと思います。
→大会実施団体へは様々な団体と協力して、適切な在り方を検討してもらえるよう周知していく。
（F委員）
・地域移行に向けての多くの人とロードマップなどが共有できるよう、発信の仕方の工夫も必要かと思います。
→学校運営協議会や地域交流の場面などでも、地域移行の動きについて情報発信するよう努める。
（H委員）
・中学校から部活動を切り離し、指導を続けたい教員には16：30～別の組織（クラブ）の指導員として兼業できる制度を作って、給料を出すようにしていけばよいと考える。
→兼業兼職の在り方や保護者負担や報酬などについても、地域移行とあわせて検討していく。
（I委員）
・種目や地域によって移行できる種目できない種目が明確であるため、まずは受け入れることができる環境（団体）があるかの調査をするべきであると考える。北海道ハイテクACアカデミーでは、既に中学生に関してはクラブチーム化が進み、中体連等にも大会帯同を行い、各選手が所属する中学校とも連携をとっている。まずは現段階で中学生まで対応できる環境があるかの確認が必要である。あとは費用などの問題もあるが、まずは地域として受け入れ可能な環境があるかがとても重要である。
→体育協会等と協力し、スポーツ関係団体等から受け入れ環境の有無について調査することも検討する。

【特に意見なし】３名

（５）令和４年度　学力・体力向上に係る予算（案）について【資料５参照】
【質問・意見等】
（A 委員）
・ICT環境の整備については、GIGAスクール構想の予算が終了した後の予算対応をぜひ考えておいていただきたいと思います。現在GIGAスクール構想で配置されているデバイスとOSを数年後どうするのか、喫緊の課題と考えます。現在のような貸与ではなく、可能であれば、マイデバイスを入学時に持たせることがベストです。
→今後の予算措置等については、国の動向も注視しながら現状で考えられる対応を整理しているところである。機器の更新や将来的な端末の準備については教育委員会としても課題として捉えており、市長部局とも確認しながら進めていきたい。
・授業においてICTをより効果的に活用するため、教材提示や児童の画面確認などに利用する小中学校向けの学習支援システムを導入する必要があるのではないかと考えます。現在導入されているGoogleWorkspaceも非常に効果的ですが、これは教員からの一方通行には適している

ものの、児童生徒が直接操作し、児童生徒間や教員に対して発信する場面に適したシステムも必要ではないかと思われます。
→学習支援システムについては、国においても全国で利用可能なシステムの整備を進めており、民間業者でもＡＩを活用した各種学習支援ソフトが提供されているが、まずは端末の使い方から始まり、現状の「GoogleWorkspace」を活用した双方向の授業展開が前提と考えている。令和４年度から、端末の持ち帰りによる家庭での活用も進めていくので、こうした取組を経て、児童生徒や教員の習熟度やニーズを確認しながら、導入について検討していきたい。

- 部活動や体育的取組がすべて「体力向上」の範疇に含めてあることに違和感を感じます。この表現が恵庭市だけのものであるなら、検討をお願いしたいと考えます。部活動には文化部もあり、「体力」は体育の要素の一部でしかないためです。
→本会議が「恵庭市立小中学校の児童生徒の学力及び体力の向上を図る」ことを目的としているため、「体力向上」という大枠の中で部活動や体育授業を取り上げていることが、違和感を与えてしまったのかと思う。部活動には文化系もあることや、体育授業であっても知識の習得や他者との協力等も重要な要素であるため、一概に全ての要素が「体力向上」に繋がるものではないことを今後も丁寧に説明していく。

（B委員）
- 予算額の増減の内訳はわからないが、実施状況から増加ととらえている。

（C委員）
- ·ICT 環境に関わる予算措置が多額になっているようなので、十分に活用ができるよう、研修や実践に期待したいと思います。
→ICT 環境の整備後、活用にあたっては教員への研修や授業での実践について、教育委員会でサポートできるよう努めていきたい。
- 予算獲得に努力している結果、継続や拡大している点が大いに評価できます。

（F 委員）
- NRT などは経年劣化を見取る資料の１つになるので、毎年確実に実施できるよう予算をつけていただきたくお願いします。特に、英語については中１から NRT 検査を実施することで、小中連携教育の推進の原動力につながると考えます。
→NRT（標準学力検査）は教育委員会主導で市内全校で実施し、その結果を各校において学校改善プラン、学力向上の取組に反映しており、学力向上の取組として今後も継続していきたい。NRT の中学１年生への英語追加については、早期の実施に向けて検討していく。

（G 委員）
- 厳しい財政状況だと思いますが、一層の増額をお願いします。
→必要な施策について精査したうえで、予算確保を進めていく。ただし、お見込のとおり財政状況が依然として厳しいため、限られた予算の中で割り振りを変動させていくこともあることをご理解願いたい。

（H 委員）
- 次のステップの学力向上の目標を、どこに置くのか。今までは、1、2 の子を 3 にする学力向上策で、一応、成果は残せている。下位 25%の割合が着実に減少。
3、4 の子を 5 にする学力向上には NRT の小 5、小 6 の社会、理科を増やすこと。中 1 の英語を増やすこと。
GIGA 端末を活用した（読解テスト）の実施が必要である。
→これまでの学力向上の取組を継続し、NRT の教科追加や GIGA 端末（タブレットパソコン）の活用を進めながら、下位層の底上げと上位層の育成が並行していけるよう、学校や本会議による意見を参考としながら取り組んでいきたい。

（I 委員）
- 小学校・中学校への指導者派遣が拡大されることは、今後の課題である。地域移行や働き方改革などの改善環境を考えると、とても良いと感じる。

【特に意見なし】２名

（6）その他
【質問・意見等】
（A 委員）
・受け入れ先の学校が、これらの取組に関して感じている課題があれば、積極的に発信していただきたいと思います。忌憚のない意見を生かしていかなければ改善もできないことを、学校と市教委の間で共有認識していくことが重要と考えます。
（B 委員）
・冬季オリンピックで日本中が盛り上がったようだが、北国恵庭のウインタースポーツの現況はどうなっているのか。部活動の欄からしかわからないが、冬の野外スポーツがないのは寂しい。時代の流れで難しいのだろうが、除雪を手伝う子どもの姿もあまり見なくなり、冬の北国の体力づくりは、コロナ禍が収束したら再考して良いのではないか。
→小学校ではスケート授業やスキー授業でウインタースポーツに触れ、北国ならではの取組を実施している。ただ、令和２年度以降はコロナ禍により、屋外や屋内でスポーツができる機会や環境が減少しているため、体育授業支援や部活動に限らず、今後の体力向上に向けた取組について、引き続き本会議の意見も参考としながら検討していきたい。
（C 委員）
・コロナ禍の中で、各学校での学力・体力の向上の取組に大変なことと思います。なかなか思った通りの実践ができない中、各学校が努力している点、大いに評価できます。
（F 委員）
・コロナ禍で参集型の会議は 1 度だけでしたが、私自身、大いに学ぶことができました。ありがとうございました。
（G 委員）
・不登校の児童生徒が増え続けています。この 1 月、学校に 1 日も登校しなかった児童は 16 人、生徒は 62 人で、1～2 日しか登校できていない児童生徒を含めると、さらに 30 人程増えます。この子たちに学習の機会をどう保障していくのか、ということを真剣に考えていかなければならないと強く思っています。手を差し伸べれば、しっかり学ぼうとする子たちばかりです。真に学力や体力の向上を考えていくとき、第一に考えていかなければならない問題の 1 つです。具体策についてぜひ、検討をお願いします。
→不登校の児童生徒には、それぞれの事情や思いがあり、そのことに配慮しながら学校への復帰や、ふれあいルームを活用した社会との接点づくり等、教育支援課を中心に対応を進めているが、不登校の中で生じる学習機会の確保とともに、整備を進めているタブレットパソコンの活用が、学力だけでなく他者と触れ合う機会の創出にも繋がればと考えている。今後、個々の事情や感情に寄り添った支援と並行して進めていきたい。
（H 委員）
・長い間、読書のまち恵庭市の「読書と学力」の関係について検討されてきたが、東京・国立市の読解力研究会がインターネット上で、小中学校の語彙力を測定できるシステム「ごいーず」の試作版を専用サイトでリリース。児童、生徒が小・中学生の何年生レベルの語彙力を持っているかを判別できる。10 分間で約 60 題の語彙に関する問題を解いて判定する。（無料）
このテストを、市内小、中学生に実施させてみたい。
→貴重な意見として検討していきたい。

【特に意見なし】3名

以上